

【論文】

命令文に付加される終助詞「よ」の機能

坂元敦子

Abstract

Based on the To-Do List (TDL) update framework proposed by Portner (2004, 2007), this paper examines how the Japanese sentence-final particle *yo* affects TDL updates in imperatives. This paper argues that *yo* does not alter the imperative's property but functions as a speaker-attitude annotation stored in an extended context. *Yo* with rising intonation signals that a similar property is likely already present in the addressee's TDL, though not currently prioritized; *yo* with falling intonation signals that the property is likely absent and should be added. These annotations reflect the speaker's attitude rather than the actual state of the addressee's TDL.

1. はじめに

命令文の意味に関する近年の議論は、大きく2つの立場に分かれている。一つは、命令文の意味表示には命令演算子やモーダル演算子が含まれるとするモーダル理論を支持する立場であり、Kaufmann (2012) などが代表的である。もう一つの立場は、命令文の意味表示にはそのような命令演算子やモーダル演算子が含まれないとするミニマル理論を支持するもので、Portner (2004, 2007) が代表的である。

後者に属するミニマル志向の Portner は、命令文は命題ではなく *property* を表すとし、その力は聞き手の To-Do List (TDL) に *property* を加えることであるとする分析を提示した。例えば、(1) の命令文は (2) に示されるような *property* を持つとされる (c は発話の文脈、w* は評価世界を表す)。

(1) Leave!

(2) $[[\text{Leave!}]^{w^*,c} = [\lambda w \lambda x: x = \text{addressee}(c). x \text{ leaves in } w]$

(Portner, 2004, pp.239-240)

本稿では、Portner による TDL 更新の枠組みと日本語の終助詞「よ」の機能との関連に着目する。日本語の終助詞「よ」は、日常会話において頻繁に用いられ、話者の意図や情報管理を示す主要な要素の一つとして、終助詞「ね」と合わせてこれまで様々な研究が行われてきた (仁田・益岡 1989、益岡 1991、佐治 1991、神尾 1995、高橋 2005、Lee 2007、近藤 2008 など)。その機能がイントネーションと密接に結びついていることも、多くの研究で指摘されてきた (井上 1993, 1995, 1997、片桐 1995、Katagiri 2007、Davis 2009, 2011、森山 2010、大島 2013、Oshima 2014 など)。平叙文に現れる終助詞を分析の対象としている場合が多くみられるが、「よ」は、

(3) に示す通り命令文にも付加されうる。

(3) 窓を閉めろよ。

語用的・談話的役割を持つ「よ」は、命令文が聞き手に何をどのように提示し、聞き手の行動選択にどの程度影響を与えるかという点で、Portner による TDL 更新の過程に影響を及ぼしうる可能性がある。

本稿の構成は次の通りである。まず、第2節で Portner による命令文の分析や日本語の終助詞「よ」を対象とした先行研究の整理を行う。続く第3節では、Portner で提示された更新操作と終助詞「よ」との関連について検討する。最後に、第4節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

本節では、Portner (2004, 2007) で提案されている命令文の分析と日本語の終助詞「よ」をめぐる議論を概観する。

2.1. Portner による命令文の分析

Portner の一連の研究は、Stalnaker による Common Ground (共通基盤) の更新理論を拡張し、命令文の語用的・意味的機能を平叙文や疑問文と並行的に捉える枠組みを提示している。すなわち、平叙文が命題を追加することで Common Ground を更新し、疑問文が命題の集合を加えることで Question Set を更新するように、命令文は property を追加することで聞き手の To-Do List (TDL) を更新するというものである。この観点からは、命令文は平叙文や疑問文とは更新対象が異なる点で本質的に区別されることになる。

Portner によると、命令文は命題ではなく、項が聞き手に限定される property を表すものである。例えば、(4) の命令文 ((1) の再掲) の意味は、文脈 c における聞き手に当てはまる property として (5) ((2) の再掲) のように表される。

(4) Leave!

(5) $[[\text{Leave!}]]^{w,c} = [\lambda w \lambda x: x = \text{addressee}(c). x \text{ leaves in } w]$

命令文の談話的機能は「その property を聞き手の TDL に追加すること」であるとし、次のように簡潔に示している。C は談話の文脈、CG は Common Ground、Q は Question Set を表す。

(6) Pragmatic function of imperatives (preliminary version)

a. The To-Do List function T assigns to each participant α in the conversation a set of properties $T(\alpha)$.

b. The canonical discourse function of an imperative clause ϕ_{imp} is to add $[[\phi_{\text{imp}}]]$ to $T(\text{addressee})$. Where C is a context of the form $\langle CG, Q, T \rangle$:

$C + \phi_{\text{imp}} = \langle CG, Q, T[\text{addressee} / (T(\text{addressee}) \cup \{[[\phi_{\text{imp}}]]\})] \rangle$.

(Portner, 2007, p.357)

さらに Portner は、TDL がやるべきことの集合というだけではなく、可能世界の順位付けを導く仕組みとしても働くことを示した。

(7) Partial ordering of worlds:

For any $w_1, w_2 \in \text{CG}$ and any participant i , $w_1 <_i w_2$ iff for some $P \in T(i)$, $P(w_2)(i) = 1$ and $P(w_1)(i) = 0$, and for all $Q \in T(i)$, if $Q(w_1)(i) = 1$, then $Q(w_2)(i) = 1$.

(Portner, 2007, p.358)

つまり、TDL に含まれる要件を多く満たす世界ほど、より好ましい世界として上位に位置付けられることを意味する。Portner は、この順位付けを Kratzer (1981) の枠組みにおける順序源 (Ordering Source) と対応させている。すなわち、命令文が TDL を更新することで、Ordering Source を規定することに寄与すると述べている¹⁾。これにより、命令文が持つ多様な機能 (命令、勧誘、助言など) と優先モダルの様々な解釈 (義務、願望、目的など) との間に対応関係が成り立つことを示した。

以上の通り、Portner (2004, 2007) の枠組みでは、命令文は命題ではなく聞き手に適用される property を表し、その談話機能は聞き手の TDL へのその property の追加である。さらに、TDL に含まれる要件は可能世界の ordering source に影響し、命令の語用的機能 (命令・勧誘・助言など) は To-Do List の更新様式や順位付けの違いとして理解される。

2.2. 終助詞「よ」をめぐる議論

終助詞「よ」は、同じく終助詞である「ね」と合わせて、主に日本語学の領域において多様な観点からの分析が示されてきた。中でも、両終助詞を対比的に捉え、話し手と聞き手との間における知識共有の程度や情報の非対称性に着目した提案が多くなされている。例えば、益岡 (1991) は、「ね」と「よ」に関する大曾 (1986) の分析を出発点として考察を行い、終助詞の使用には、話し手の知識と聞き手の知識が大きく関わっていると述べている。「よ」が使われるのは両者の間にずれがあり、対立的な関係にあると判断される場合だという。(8) の「よ」の存在は、話し手と聞き手の知識が異なるという判断、つまり、文の情報内容を聞き手が知らないであろうという話し手の想定を表しているという。このように、話し手と聞き手の知識・情報の状態に焦点を置いた説明は、日本語学習者向けのテキストを含めて広く見受けられる。

(8) 今日は誰もお客見えてませんよ。(「さびしんぼう」) (益岡, 1991, p.96)

「よ」が対話調整機能を持つとした分析もある (片桐 1995, Katagiri 2007)。終助詞が主に話し言葉で使われることに着目し、対話は複数の参加者によって行われる共同行為であり、また、進行に伴って臨機応変に対応する必要があるものという観点から「よ」を捉えている。その分析によると、「よ」は当該情報を話し手が自分のものとして受容していることを示し、この情報受容表示とイントネーションの機能 (上昇調イントネーションは発話の継続性、下降調イントネーションは区切り) が組み合わせられて対話調整が実現されるという。(9) の会話において、A の二つ目の発話 (「いえ、二個必要ですよ。」) では、下降調イントネーションの「よ」によって A

が確実とみなしている情報を提供することで、埋め込み対話を終結させているという。同じく B の最後の発話（「はい、できましたよ。」）は、やはり下降調イントネーションの「よ」によって行為の完了によるタスクの一段落を伝えているという。

(9) A：それでは次に玉葱を刻でくださいね。

B：一個で十分ですね。

A：いえ、二個必要ですよ。

B：はい、できましたよ。

(片桐, 1995, pp.44-45)

「よ」がイントネーションによって異なる働きを見せることは、他の多くの文献でも指摘されている。上昇調と平調という2つのイントネーションを伴うとする分析が多い中、大島 (2013)、Oshima (2014) は上昇調、平調（非上昇調）、上昇下降調という3つのイントネーションを伴うとしている。また、郡 (2018) は、「よ」を含めたいくつかの終助詞相当表現のアクセントとイントネーションを会話資料に基づき検討しており、「よ」は「わからせたい気持ちを込める手段のひとつ」と捉えられるとしている。その分析によると、疑問型上昇調は、やさしく教えるように言う場合や聞き手の反応を待つ場合に使われる（= (10)）。また、協調型上昇調と平坦調は分からせたい気持ちを込める場合に（= (11)）、上昇下降調と急降下調は分からせたい気持ちを強く訴えかける場合に使われる（= (12)）。無音調も分からせたい気持ちを込めるときに使われるが、断定的な言い方、特に一方的な通告として言う場合や、相手の意見と違うことを強調する場合に多く使われるという（= (13)）。

(10) [そんなことがあったのは] すごい昔だよ

(11) [離れた人に声をかける] こちらですよ

(12) [答えがわからないので助けを求めて] わかんないよ

(13) [ある人の年齢が 32 だと知って驚いた相手が「32 なの?」と確認を求めたのに対し、そのとおりだの意味で] 32 だよ

(郡, 2018, pp.15-16)

平叙文に現れる「よ」を対象にしている研究が多い中、命令文に現れるものについて言及している研究として、ここでは井上 (1993) と Davis (2011) を確認する。井上 (1993) は、「現在動作実行のタイミングにあるか否か」「話し手の意向と矛盾することがらが存在するか否か」という2つの観点から命令文を整理している。終助詞「よ」（および「ね」）は、主に後者の「話し手の意向と矛盾することがらが存在するか否か」を表す役割を担うとされる。命令文そのものは「話し手のスクリプト（実行すべき動作の内容とそのタイミング）」を提示して聞き手の知識や行動につなげようとする行為であるとし、そこに付加された「よ」は、当該命令が「聞き手や現実との矛盾を前提にしているか」を示す標識になっていると述べている。井上によれば、「よ H」（上昇調）は矛盾を前提としておらず、確認・注意喚起・一方的なゴーサインのニュアンスを持ち（= (14a)）、「よ L」（下降調）は矛盾を前提とし、異議・非難・説得のニュアンスを持つという（= (14b)）。

(14) (写真をとる時に)

a. はい、写真をとるから、動かないで (よ H)。

b. ちょっと。写真をとるんだから、動かないで (よ L)。 (井上, 1993, p.356)

Davis (2011) は、「よ」という終助詞そのものと、上昇調・下降調のイントネーションを分解して捉え、文の意味を context-change potential (CCP) として記述する動的意味論の枠組みで分析を行っている。平叙文が談話参加者の public beliefs (PB) を更新するのに対し、命令文は public intentions (PI) を更新するという。命令文の Force 主要部 $[[IMP]]$ はエージェント集合を未決定のまま残す open-agent CCP として定義される (= (15))。ここで A_c は文脈 C における行為主体、 PI_c^A は出力文脈 C' におけるエージェント集合 A の PI の集合である。

(15) $[[IMP P_{(c, st)}]] = \lambda A. \{ \langle c, c' \rangle \mid [[P]](A_c) \in PI_c^A \}$ (Davis, 2011, p.158)

Davis (2011) は、命令文に「よ」が付加されると、更新の対象が談話参加者全員に拡張されると主張する。そのため、話し手 (S_c) と聞き手 (A_c) の二者のみの文脈を仮定すると、その CCP は (16) のようになる。

(16) $[[IMP P_{yo}]] = \{ \langle c, c' \rangle \mid [[P]](A_c) \in PI_{S_c}^A \wedge [[P]](A_c) \in PI_{A_c}^A \}$ (Davis, 2011, p.159)

また、「よ」が伴うイントネーションには上昇調と下降調があり、その機能は平叙文に付加される場合と同様であると分析している。すなわち、上昇調は行為選択の最適化を、下降調は修正操作を含む更新を示す。Davis (2011) によれば、「よ↑」(上昇調) は、聞き手がまだ行為を選択していない状況で用いられ、当該行為が文脈上合理的・最適であると示すガイドの効果を持ち (= (17))、「よ↓」(下降調) は、聞き手の既存の意図が命令内容と矛盾する状況で多く用いられ、その矛盾を除去して命令を通すような強い催促・強制的な効果を持つ (= (18))。

(17) [ミタカは、高いところに上ろうとして、ゴダイを四つん這いにさせて踏み台にしている。彼がゴダイに言う。]

しっかり支えててくれよ↑ (Davis, 2011, p.175)

(18) [母が息子に「温かいうちにごはん食べに来て」と呼びかける。息子はしばらくしてもテーブルに来ず、ビデオゲームに夢中になっている。そこで、父親がもう一度息子に呼びかける。]

早く来いよ↓ (Davis, 2011, p.171)

以上の通り、終助詞「よ」は、話し手と聞き手の情報の不一致や、話し手が情報をどの程度自分のものとして提示するかなどを示す手段として多く研究されてきた。イントネーションと結びついた異なる談話機能も報告されており、命令文に付加される場合もイントネーションによる差異が観察されている。

3. 考 察

本節では、Portner (2004, 2007) が示す To-Do List (TDL) 更新の枠組みを踏まえ、終助詞「よ」が TDL の更新過程でどのような効果をもたらさうかを検討する。「よ」は複数のイントネーションを伴うが、ここでは、命令文に現れることが先行研究の中でも指摘されている上昇調イントネーション（「よ↑」）と下降調イントネーション（「よ↓」）を考察の対象とする（井上 1993、片桐 1995、Davis 2011 など）。

前節で確認した通り、Portner (2004, 2007) に従えば、命令文の基本的機能は命令内容に対応する property を聞き手の TDL に追加することであり、文脈 $C = \langle CG, Q, T \rangle$ に対して (19) のようになる。本稿ではこの基本的更新規則を前提とする。

$$(19) C + \varphi_{imp} = \langle CG, Q, T[addressee / (T(addressee) \cup \{\llbracket \varphi_{imp} \rrbracket\})] \rangle.$$

その上で、日本語の命令文において「よ」が付加された場合、イントネーションに応じて次の効果をもたらす可能性があることを一つの見方として提示する。

- (20) a. よ↑：「同様の内容が TDL 内に存在しているだろうが、あったとしても現時点では上位にはないだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持つ。あくまで態度の表示であり、「当該内容が実際には聞き手の TDL の上位にある可能性」や「当該内容が聞き手の TDL の上位にあることを話し手が認識している可能性」を排除しない。
- b. よ↓：「当該内容が聞き手の TDL に含まれていないため、新たに導入する必要があるだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持つ。あくまで態度の表示であり、「当該内容がすでに聞き手の TDL に含まれている可能性」や「当該内容が聞き手の TDL に含まれていることを話し手が認識している可能性」を排除しない。

「よ」は、命令文が示す property を変えることはない。そのため、たとえ付加されていても、その意味表示は付加されていない場合と変わらない。任意の文脈 C に対しては、(21) のように表せる。「よ」は、話し手の態度を発話注釈として生み出し、文脈の注釈領域 A (AttList) に記載する。すなわち、 $\llbracket \varphi_{imp} yo \rrbracket$ は $\llbracket \varphi_{imp} \rrbracket$ と同一の property を指すが、発話は話し手の態度 (Att_{sp}) を伴って記録される。

$$(21) \llbracket \varphi_{imp} yo \rrbracket^c = \llbracket \varphi_{imp} \rrbracket^c$$

このように仮定すると、文脈更新は次のように表せる。文脈 C は $\langle CG, Q, T, A \rangle$ と拡張する (A は語用的注釈領域)。通常の命令文と同様に property の追加が行われるほか、注釈の追加が行われる。

$$(22) C + \varphi_{imp} yo = \langle CG, Q, T', A' \rangle$$

ただし

$$T' = T[addressee / (T(addressee) \cup \{\llbracket \varphi_{imp} \rrbracket\})]$$

$$A' = A \cup \{(\llbracket \varphi_{imp} \rrbracket^c, Att_{sp})\}$$

Att_{sp} は、発話時に割り当てられる話し手の態度を示すラベルであり、A の要素は「(property, Att_{sp})」というペアとして保存される。Att_{sp} はあくまで注釈であり、TDL の中身そのものを書き換えるものではない。「話し手の態度」を示すことに留まるため、実際の聞き手の TDL の状態や行動選択、話し手の本心を反映していかなくともよい。

次の (23) は (14a) の再掲である (ただし「よ」のイントネーション表記を改めている)。(26) の命令文は「聞き手は動かない」という property を聞き手の TDL に追加する。付加されている「よ↑」は、『動かない』とい内容は聞き手の TDL 内にすでに存在しているだろうが、発話時点では上位にないだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持っている。ただし、これはあくまでも話し手の態度にすぎないため、「当該内容が聞き手 TDL の上位にある可能性」や「当該内容が聞き手の TDL の上位にあることを話し手が知っている可能性」を排除しない。実際に、「写真を撮る時に被写体は動かない方が良い」ということは、一般的に広く共有されている認識の一つであると言えることから、被写体である聞き手の TDL 内上位に「動かない」という property が存在している可能性や、その property が聞き手の TDL 内上位に存在していることを話し手が認識している可能性は十分にある。

(23) (写真をとる時に)

はい、写真をとるから、動かないですよ↑ (cf. 井上, 1993, p.356)

次の (24) は (14b) の再掲である (ただし「よ」のイントネーション表記を改めている)。(24) では、「よ↓」が付加されている。(23) と同様に、「聞き手は動かない」という property を聞き手の TDL に追加する。(24) の発話全体から、意図的かどうかとは関係なく、聞き手がすでに動いてしまったか、もしくは動きそうな状況であることが推測される。この「よ↓」は、『動かない』という内容は聞き手の TDL に含まれていないため、新たに導入する必要があるだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持っている。ただし、こちらでもあくまでも話し手の態度にすぎないため、「当該内容がすでに聞き手の TDL に含まれている可能性」や「当該内容が聞き手の TDL に含まれていることを話し手が知っている可能性」を排除しない。「よ↑」の場合と同様に、「写真を撮る時に被写体は動かない方が良い」という一般的な認識に基づくと、被写体である聞き手の TDL に「動かない」という property が含まれている可能性や、その property が聞き手の TDL に含まれていることを話し手が認識している可能性は十分にある。

(24) (写真をとる時に)

ちょっと。写真をとるんだから、動かないですよ↓ (cf. 井上, 1993, p.356)

次の (25) は (17) の再掲である (ただし「よ」のイントネーション表記を改めている)。(25) の命令文は「聞き手はしっかり支える」という property を聞き手の TDL に追加する。付加されている「よ↑」は、『しっかり支える』とい内容は聞き手の TDL にすでに存在しているだろうが、発話時点では上位にないだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持っている。聞き手がすでに四つん這いになっている状況であることを踏まえると、「しっかり支える」という property がすでに聞き手の TDL 内上位に含まれている場合や、上位に含まれていること

を話し手が認識している場合も十分に考えられる。そのような場合であっても、「よ↑」の持つ効果は話し手の態度にすぎないため問題とはならない。

(25) [ミタカは、高いところに上ろうとして、ゴダイを四つん這いにさせて踏み台にしている。彼がゴダイに言う。]

しっかり支えててくれよ↑ (cf. Davis, 2011, p.175)

次の(26)は(18)の再掲である(ただし「よ」のイントネーション表記を改めている)。(26)は「聞き手は早く来る」という property を聞き手の TDL に追加する。付加されている「よ↓」は、「『早く来る』という内容は聞き手の TDL に含まれていないため、新たに導入する必要があるだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持っている。すでに母親から呼びかけられているという状況を踏まえると、「早く来る」という property が聞き手の TDL に含まれている場合や、含まれていることを話し手が認識している場合も十分に考えられる。そのような場合であっても、「よ↓」が持つ効果は「よ↑」と同じく話し手の態度にすぎないため、問題とはならない。

(26) [母が息子に「温かいうちにごはん食べに来て」と呼びかける。息子はしばらくしてもテーブルに来ず、ビデオゲームに夢中になっている。そこで、父親がもう一度息子に呼びかける。]

早く来いよ↓ (cf. Davis, 2011, p.171)

本節では、Portner (2004, 2007) が提案する TDL 更新に対して、終助詞「よ」がその伴うイントネーションによって異なる態度的修飾を付与しうることを示した。具体的には、「よ↑」は「property と同様の内容が聞き手の TDL 内に存在しているだろうが、あったとしても現時点では上位にはないだろう」という見解を、「よ↓」は「property の内容が聞き手の TDL に含まれていないため、新たに導入する必要があるだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持つ。いずれも話し手の態度にすぎないため、聞き手の TDL の実際の状況や話し手の実際の認識を反映していなくともよい。

4. おわりに

本稿は、Portner (2004, 2007) の TDL 更新という枠組みを出発点に、終助詞「よ」が命令文における TDL 更新にどのように影響しうるかを考察した。Portner による命令文の分析と終助詞「よ」に関する先行研究(井上 1993, Davis 2011 など)を踏まえ、「よ」が命令文の示す property 自体を書き換えるのではなく、話者の態度 (Att_{sp}) を付与するという方法で機能しているという可能性を提示した。具体的には、上昇調イントネーションの「よ↑」は、「property と同様の内容が聞き手の TDL 内に存在しているだろうが、あったとしても現時点では上位にはないだろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持ち、下降調イントネーションの「よ↓」は、「property の内容が聞き手の TDL に含まれていないため、新たに導入する必要があるだ

ろう」という見解を話し手の態度として示す効果を持つ。これらはあくまでも話し手の態度にすぎず、聞き手の TDL の実際の状況や話し手の実際の認識を反映している必要はない。文脈の拡張や発話注釈を導入することで、命令文それ自体の意味表示だけでなく、それがどのように提示されるかという話し手の態度も、当該命令文の解釈やその後の聞き手の行動に影響を及ぼしうる可能性を示した。

なお、本稿では、命令文に現れる「よ」が伴うイントネーションとして、上昇調と下降調の2種類を対象とした。しかし、平叙文に現れる「よ」を扱った大島 (2013)、Oshima (2014) によると、「よ」には上昇調・平調 (非上昇調)・上昇下降調という3種類のイントネーションが認められるという²⁾。本稿が対象としていない上昇下降調を伴う「よ」は、平調の「よ」の変種として分析されており、発話に子供っぽく甘えたニュアンスを加え、聞き手に同情を求める気持ちを表すとされる。

(27) (望遠鏡を覗いたが、霧がかかっている何も見えない)

なんにも見えないよ (う) ↑ ↓

(大島, 2013, pp.56)

この上昇下降調イントネーションを伴う「よ」は、(28) に示すように、命令文にも付加されると考えられる。命令文において上昇下降調イントネーションを伴う「よ」がどのように機能するかについては、今後の課題としたい。

(28) a. ちょっと。写真をとるんだから、動かないでよ ↑ ↓

b. 早く来いよ ↑ ↓

参考文献

- Davis, Christopher. (2009). Decisions, Dynamics and the Japanese Particle *yo*. *Journal of Semantics*, 26, 329-366.
- Davis, Christopher. (2011). *Constraining Interpretation: Sentence Final Particles in Japanese* (Ph. D. thesis), University of Massachusetts Amherst.
- Kaufmann, Magdalena. (2012). *Interpreting imperatives*. Springer.
- Kratzer, Angelika. (1981). The notional category of modality. In Hans-Jürgen Ekmeyer and Hannes Rieser (Eds.), *Words, worlds, and contexts: New approaches to word semantics*, 38-74. Walter de Gruyter.
- 井上優. (1993). 「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』: 命令文・依頼文を例に」. 『国立国語研究所研究報告集』14, 333-360.
- 井上優. (1995). 「方言終助詞の意味分析」. 『国立国語研究所報告集』16, 161-184.
- 井上優. (1997). 「もしもし、切符を落とされましたよー終助詞『よ』を使うことの意味ー」. 『言語』26, 62-67.
- 神尾昭雄. (1990). 『情報のなわ張り理論』. 大修館書店.
- 片桐恭弘. (1995). 「終助詞による対話調整」. 『言語』24, 38-45.
- Katagiri, Yasuhiro. (2007). Dialogue functions of Japanese sentence-final particles 'Yo' and 'Ne'. *Journal of Pragmatics*, 1313-1323.
- 近藤安月子. (2005). 『日本語学入門』. 研究社.
- 郡史郎. (2018). 「終助詞類のアクセントとイントネーションー『よ』『か』『の』『な』『でしょ (う)』『じゃない』, とびはね音調の『ない』ー」. 『音声言語の研究』12, 13-26.
- Lee, Duck-Young. (2007). Involvement and the Japanese interactive particles *ne* and *yo*. *Journal of Pragmatics*,

363-364.

- 益岡隆志. (1991). 『モダリティの文法』. くろしお出版.
- 森山卓郎. (2010). 「文の意味とイントネーション」. 宮地裕 (編) 『講座 日本語と日本語教育』 (pp.147-168). 明治書院.
- 仁田義雄, 益岡隆志. (1989). 『日本語のモダリティ』. くろしお出版.
- 大島デイヴィッド義和. (2013). 「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」. 『国際開発研究フォーラム』 43, 47-63.
- Oshima, David Yoshikazu. (2014). On the functions of the Japanese discourse particle *yo* in declaratives. In Eric McCready, Katsuhiko Yabushita, and Kei Yoshimoto (eds.), *Formal Approaches to Semantics and Pragmatics: Japanese and Beyond* (pp.251-271). Heidelberg: Springer.
- Portner, Paul. (2004). The semantics of imperatives within a theory of clause types. *Proceedings of SALT*, 14, 235-252.
- Portner, Paul. (2007). Imperatives and modals. *Natural Language Semantics*, 15, 351-383.
- Portner, Paul. (2016). Imperatives. In Maria Aloni and Paul Dekker (Eds.), *The Cambridge handbook of formal semantics*, Cambridge University Press.
- 佐治圭三. (1991). 『日本語の文法の研究』. ひつじ書房.
- 田川拓海. (2019). 「独話に現れる愚痴命令文と反事実性」. 『日本語文法』 19, 126-134.
- 高橋太郎. (2005). 『日本語の文法』. ひつじ書房.

注

- 1) 詳細は Portner (2007) を参照。
- 2) 大島 (2013)、Oshima (2014) における平調 (非上昇調) イントネーションは、本稿における下降調イントネーションに該当する。

[さかもと あつこ 言語学・英語学]